

班制度を再考する

日本連盟プログラム委員会委員 武井重利
「スカウティング」誌 平成8年9月～9年3月掲載

《班制度が充実し、プログラムを活発に展開するために》

<ヒントとしての即効性はないが…>

「プログラムのヒント」を期待していたのに、班制度を再考してヒントになり得るだろうか？

そう。班制度を考えても、すぐプログラム活動に役立つとは限らないし、ヒントとしてすぐ使えるような“即効性”はない。

しかし、どんなに有用なプログラムを楽しみ、活発に展開していても、班制度を採用していなければ成果（教育効果）は半減しているのである。隊長が班制度の特徴を十分理解し、運用の仕方を間違えなければ、やがて各班は活発に動き出し、プログラム活動は成功することに気がつかなくてはならない。

「班制度を再考するときの話」が、これからのプログラムを計画するとき、そして実施するときになって、班制度の活用の仕方、隊長としての心構えが多分に役に立つであろう。

<隊登録が減少している問題>

全国の「加盟登録に関する統計」から、全国平均の「隊数」が年々減少し、それとは逆に「班登録」が増えているのが読み取れる。10年間前と平成8年3月末を比べれば、隊登録数が25%減少し、班登録数は2.2倍に増加しているのがわかる。あなたの隊、あなたが所属している地区の過去5年間の推移と現況はどうであろうか。

<班制度をどう理解したか>

奉仕の精神に生きがいを感じ、スカウティングに興味を覚え、指導者講習会、そしてウッドバッジ研修所を修了すると、いつの間にかボーイ隊の隊長に任命された今、責任を重く感じるものである。

「班制度とは、異年齢の少年たちが小集団である班を編成し、班は仲間同志の強いきずなで結ばれ、自発活動と“ちかとおきて”の実行の場になり、指導性と協調性が養われ、一人ひとりの人格を培う（つちかう）最良の方法である」と教わったのだが、現実はどうであろうか。

「順風満帆とはいかないまでも、班長はしっかりしているし、班活動もまあまあの行われている」といった隊が多く健在なのは、まことに喜ばしいし、よいスカウトが育っていくものと期待されている。ただ、年々少しづつだが“スカウトが減少気味な隊”が増えているのが気になることである。

<班制度の現状を把握する>

一方、隊長が思うようには班長が動いてくれず、どうしたものかと思案投げ首の状況もよく見受けられるようになってきた。

班制度の大切さ、重要さは十分わかっているが、現実には研修所で聞いた講義とは相当かけ離れており、どうしてもうまくいかない。そうした隊や班において現れた現象を集めてみると、次のようである。

《よく見受けられる現象》

1. 班長が塾のために欠席がちである。

1. 出席率の良い班と悪い班の差が開きすぎる。

1. 上級班長がない。

1. 班長が班員をまとめられない。

1. 班集会が行われない。

1. 班長訓練ができない。

1. 班制度に保護者の理解がない。

1. 副長が足りない。

1. 隊リーダーが役務分担を果たしていない。

<班制度が展開できない状況>

隊登録していても、実際には1個班程度のスカウト数しかない隊も目立つ。その現状は…

・スカウト数が少ないので2個班が編成できない。

理由は

○上進者がいない

○上進者がいてもすぐにやめてしまう

○入隊する少年がいない

・班登録はしているが活動していない（最悪！）

理由は

○スカウトが出てこない

○出てきても盛り上がらないので次から集会に来ない

<班登録になったのは、児童数の減少が原因？>

隊登録ができなくなった団では、その決定的な理由として、『青少年人口が減少したために、入隊者や上進者がいなくなったのだ』と口を揃えていわれる。果たして青少年の人口が減少したから入隊者が少ないのか？

確かに高年齢層の人口が増加し、青少年の人口は減少しつつあるが、問題は「ボーイスカウト年齢に該当する少年100人あたりのスカウト数」が、年々減少していることである。全国平均でいえば、10年前では100人あたり2.19人加入していたものが、今年3月末では1.60人まで低下している。

このことは、青少年がいるのに加入率が減少しているのだということを示している。あなたの隊の周囲には少年の影が薄いかもしれないが、もう少し範囲を広げればまだまだ入隊してもよさそうな少年はたくさんいるのである。要はこれからどうやってスカウティングに引き込むか、仲間にしていくか、努力する方法を考えねばならない。

<期待されるボーイスカウト>

少年たちをとりまく環境は？ というと、生活水準がますます向上して物質的な豊かに恵まれ、便利で快適な生活を甘受できるようになった。

その反面、快適な生活への過度な依存、家庭機能の低下、人間関係の希薄化、自然が次第に失われていくなどの現象が目立ち、少年たちの心身の発達に大きな影響を及ぼしつつある。

ボーイスカウトの年代は人格を形成する最も重要な時期にあり、人と自然とに触れ合うなかで、自然

の神秘に感動したり、他の人と協調することによって耐える心、思いやる心、自ら問題を解決する能力を養うなど、少年たちは班制度を基本としたスカウティングを通じてたくましく成長することができる。学校週5日制が進展しつつあるこの頃、社会ではボーイスカウト運動に対する期待が、ますます高まっていることは事実である。

では、何が班制度を阻害しているのか？ 隊長の指導が不十分なのか。それとも指導者訓練の内容が的を得ていないのか。問題提起が続くが、その解決策はあるのだろうか？

《班制度が充実し、プログラムを活発に展開するために》

<隊長が抱える難題>

「精気なき少年たち」

どうも近頃のスカウトには精気がない。やる気がない。隊長が期待するようには、プログラムにのってこないのはなぜだろうか。

現在隊長任務を持つ年代層には幼い時に多少なりともガキ大将を中心とした集団で遊んだ経験がある。少年期での小集団の遊びは、予期につけ悪しきにつけ興味のあるものを次々に考えては楽しんだ。その遊びには危険があったが、仲間と助け合い、危険を克服した充実感を共有した。とりわけ異なった年齢の子との遊びは、家族以外の社会を知る、重要な成育過程の第一歩であった。

ところが今や経済発展と引き替えに、ファミコンの普及や塾通いに車がかかり、少年から本能的な遊びを奪って、野性味なき少年へと変質させてしまった。

遊び仲間も異年齢から同年齢へ、ガキ大将がいらない横並びのグループでは何事も決めるのはジャンケンであり、先走ってはいけないし、遅れてもいけない同質集団へと変わってきた。今街角で見られるのは数人でたむろする精気なき少年たちであり、遊びの予約ができなかった少年が一人で壁に向かってボール投げをする姿である。

こうした活力のない、野外活動に興味を示さなくなった少年たちを迎えて、隊長としてどのように扱ったらよいか、思い悩むのである。

<幅が広がった年齢層>

平成元年に行われたカブスカウト部門の改訂にともなって、小学校5年生の2学期からボーイ隊に上進できるようになった。日本連盟が定めた方針をすぐ実行する団では、9月に5年生を上進させ、ボーイ隊の隊長は中学3年生から小学5年生という、幅広い年齢層を受け持つようになり当惑するのであった。それは知識、興味、趣味、体力等に差がありすぎて、プログラムの焦点をどの辺に置くかが問題となった。

また中学生と小学生は参加に都合のよい日時が合わず、それに上進したばかりのスカウトはまじめでめったに休まないで、小学校5年生だけの集会になってしまうことがある。隊長は班長も次長もいない集会に、大きなため息をつくのである。

<ボーイ隊にも女子が加入できる>

平成8年度から、全部門にわたって女子が加入してもよいことになった。ピーパー隊やカブ隊では、女子が加入しても大きな変化はないので加入することにすぐ賛成するが、ボーイ隊ではためらうものがある。

女子が加入することによって、どのように変わっていくのだろうか。表面はうまくいっているように見える男女のつき合いも、とつ、どんな形で問題が生じてくるのか、隊長としてある程度の予測と心構えが必要になった。それにしても判断材料となる、具体的な研究成果とか資料を入手できない悩みがある。

<少人数の隊でのプログラム>

昭和50年まではきわめてまれであった班登録が、現在では全体の1割を越えたのは9月号（平成8年）のデータで明らかである。

どの隊でもスカウト数は年度によって多少の増減はあるが、班登録をせざるを得なくなったのは、直接的には隊長の責任であり、大きくは団委員会の責任でもある。

1個班、または1個班に近いボーイ隊では、ダイナミックな活動が組めず、細々と集会が続いている状況である。少ない人数でも楽しめるプログラムはないかと工夫を怠らすがどうも決定打がない。

<隊長の意欲と努力>

隊長が抱える共通の課題の他に隊内や団関係者との人間関係がうまくいかなかったり、個人的な問題があったりするが、班制度をうまく活用しようとするには、そうした問題を克服することが先決である。

そして班制度を成功させるためには、隊長として研究する意欲と、実行しようとする努力、さらに経験の積み重ねしかない。やる気のない少年でもおもしろさがわかれば俄然活発になるし、どのスカウトも無限の可能性をもっていることを信じて行動しよう。

スカウティングこそ少年を野外に導き出し、遊びを通して人格を形成する、本来の姿が形成されるのだ。

《班制度を再認識する》

<隊長が学ぶ姿勢>

ボーイスカウト運動が戦後の昭和22～23年に復活した当時は隊長ハンドブックではなく、指導者講習会で入手したガリ刷りの資料が唯一の頼みであった。

その後岡本建一氏の著作による「スカウティングの基本的解説」や大阪連盟編集の「ボーイスカウトポケットブック」が出版され、復活したスカウト運動の発展に弾みがかかった経緯がある。

今や隊長ハンドブック他多くの資料が、手軽に入手できるようになった。その反面気軽に読んで重要な部分を見逃すことがあり、課題研修の際にあらためて班制度の価値を再認識することが多い。

班制度の要点を十分に把握し、隊長が抱える問題点を解消するために隊長ハンドブックの【第1章】をもう一度熟読することが大切である。

それでは指導者講習会とウッドバッジ研修所で学んだ次の『班制度』の要約を再確認しよう。

<『班制度』の要旨>

【班制度の仕組み】

- ・少年は仲間を作っているいろいろな活動をし、そこでは自然にリーダー（ガキ大将）ができる。
- ・ボーイスカウト隊の班は、少年の人格を築き上げる最も有効な方法として「班」を組織し、少年心理の特性を制度化したものである。
- ・「班」は集まる都度編成するグループではなく、ある期間長続きするグループで、あらゆる活動の

単位となる。

- ・小グループの中から選ばれた班長を信じ、責任を与える「隊」は各班の班長が集まって運営する、少年たちの活動の場である。
- ・少年たちを信頼して一人ひとりに任務と責任を与え、班運営を任せ。そのことは責任感、指導性、協調性、自信などといった社会人としての資質が培われていく。
- ・班制度はボーイスカウト教育を成功させる最良の方法である。

[班の活動]

- ・班は班長を中心に6～8人のスカウトによって構成する集団で、最も活発に仲間との相互関係が経験できるサイズである。
- ・しかも異なった年齢構成の集団で年長者が少年の後輩を導き、様々な経験を積み重ねていく異年齢層教育であり、班員を強いきずなで結びつけるのに役立っている。
- ・班ではちかちかとおきてを実践する機会があり、協力、友情、指導性などを体験することができ、その目的は一人ひとりの品性を培う。
- ・班名、班旗、班記号、班呼、班標語、班精神を決めて楽しく活動することは、仲間意識を高め、班が活発に動くスタート台である。

[班長が果たす役割]

- ・班長は班のリーダーとして班員に模範を示し、班員と話し合って班のプログラムを実施して行く。
- ・各班員に進級課目や野外活動を指導し、班内の任務を分担させ、また班員の進歩に手を貸す。
- ・班長会議の一員として隊のプログラム立案に参画し、班員の意見や希望を伝える。班に戻ると班長会議の結果を周知徹底させる。
- ・隊活動には班を率いて参加する。そこでは他班との有効的な競争によって、班精神が高まっていく。

[隊長の大きな責務]

- ・班制度の正しい理解と運用こそ、「スカウティングの成功」へ導く鍵であることを、深く認識する。
- ・班活動はボーイスカウト運営の基本であり、隊長はスカウトたちの欲求と興味をつかみ、進歩制度とのかみ合わせを考えながら、プログラム活動の方向づけをしていく。隊長のもう一つの重要な役目は班長訓練である。
- ・このプロセス（過程）の中で、班長訓練を通じて到達目標を明確に示し、プログラムを展開するためのスカウト技能を指導する。
- ・隊集会で、各班は隊の優秀班になろうと競い、互いにより刺激を受ける。それでいて隊を良くするために他の班と協力する。

「スカウトたちをグループ分けして、班長・次長を任命すれば自発的な活動が始まる」と思いがちだが、班制度の中で一番錯覚しやすいところである。それらはぜひ解明しておかなければならない。

《誤解しやすい自発活動》

<隊長ハンドブックの一節から>

隊長ハンドブック「組織と制度」第1章では、班制度を重視する理由のひとつに、『班は、少年が自

然に作る形態』という小節に取上げている。その内容は

「少年は放任しておいても小さな集団グループを作る。その理由はどうであれ同じ年頃の子供たちとか、隣近所に住んでいる者同士などで、自然な形のグループができあがる。グループができると、そこには自然の成り行きでいわゆる「がき大将」と呼ばれるリーダーができる。

班制度はこういった特性を採用し、成人指導者の導きによって、少年たちに役立つ変化のある活動を与え…云々」とある。

ここで留意すべきことは、そのあとに「信頼される社会人としての資質は、少年を信頼して一人ひとりに責任を負わせ、班運営を任せ、班意識を高揚する班活動を行うことによって培われる」と述べている点である。

その事を鵜呑みにして、あるいは過信してしまい、『隊長が班編成を行い、班長と次長を任命し、訓辞を与えて班運営をまかせれば、少年たちの自発活動によって班は動き出していくのだ』とってしまうところから問題が発生する。

一番大きな誤解は、自然に発生した少年たちの集団と、ボーイスカウトの班の形態が異なっているのに、同一視してしまうことにある。

このような誤解が、また錯覚が班制度を進める上で「停滞する大きな要因」となることを知らねばならない。

<がき大将と班長の立場の差>

自然発生の集団は、がき大将のもとに大人の介入（指導）なしに活発な活動を行っているのである。大人が活動を奨励してもいないのに、がき大将はみんなの興味をまとめながら絶えず前進しているのである。その活動は生き生きとして積極的であり、内容の是非はともかく、実に見事に展開するのである。

一方ボーイスカウトの班は人為的に構成され、大多数の隊員はどの班に入るか好き嫌いも言えずに班分けされがちである。進入隊員も、班長の家に近いとかの単純な理由で、所属する班が決められてしまう。

班長は好むと好まざるとにかかわらず、割当てられた数名の班員を率いていかねばならない、大変な責任を負うことになる…。というような状況に追込んでいるとすれば、隊長として班長の立場を出発点から考え直し、もう一度出直す必要がある。

<自発活動と放任>

『スカウティングは、少年たちによる自発活動によって行われる』。まさにその通りであるが、自発活動を尊重するあまり、スカウトたちが活動を始めるのをじっと待っている隊長がいる。しかし班長はどうしてよいかわからずスカウティングの楽しみかたや班員の扱いかたも知らず、責任ばかり強調されて悩んでいる。気がつくとも班員たちの出席が悪くなり、やがて辞めていく。

ある場合は、曲がりなりにも活動している班があり、スカウトがせつかくやる気になって活動し出したのだからその自発性を大切にしようと、隊長は多少の間違いに何もいわない。そうするとスカウトたちは「それでいいものだ」と思って不都合な行動をさらに拡大してってしまう。

自発活動を自己流に解釈し、いうべきことを言わず、適切な指導がなければそれは放任であり、スカウト教育ではなくなる。隊長として班長訓練を行い、『よいことをほめ、是正すべきことは示唆する』、場合によっては明確に明示するなど、班長の牽引力を強めていかねばならない。

<集団の特徴を考察する>

以下に掲げた表は、「少年たちが自然に構成した集団」と「ボーイスカウト隊における班」との様々

な特徴を考察し、対比したものである。これまでの指導者訓練のうち、いくつかのウッドバッジ実修所ボーイスカウト課程のコースで資料として提供した内容であるが、隊長は自然集団の特徴をつかみ、ボーイスカウトの班が自然集団のような固い結束を結ぶように、援助する必要があることを理解できよう。

班長を中心とした本当の意味の自発活動が始まるように、様々な工夫をし、最善の努力をしなければならぬ。

《班の成立》

<班長を選任する>

毎年1～2回は班長、次長を選任する時期を迎えるが、だんだんと低年齢化してはいないだろうか。理想的には中学2年の後半から3年の1学期までを班長として務める時期にしたいものだ。といっている間に、あるスカウトが班長に適任の時期になると、保護者から『班長になると忙しくて勉学に支障があるから…』といって退団の申し出がある場合がある。隊長としては、[班長になって活動することにより、リーダーシップを身につけ、よき社会人たる資質を育む重要な時期なのに]と残念な思いをする。

保護者との話し合い、連携を図るなどの努力は行うべきだが、要は歴代の班長が素晴らしい活躍をし、たくましく成長していく姿を誇れるように積み重ねが必要なのである。

これから任命しようとするスカウトが頼りなく見えても、班長の任務が務まるように様々な班長訓練を進めれば、班も隊も未来はとて明るい。

「少年たちの自然集団」と「ボーイスカウト隊の班」の特徴を対比する

	自然集団	ボーイスカウトの班
1、構成と精神年齢	近所の少年たちで構成し、集団の目標によって人数の増減がある。年齢には幅があるが、精神年齢は全ての点で似ている。	人為的グループであり、新規加入のスカウトがあると、既設の班に割当てられて常時6～8人の編成している。すでに構成している古いメンバーと新入りスカウトがなじむにはやや時間がかかる。
2、知的能力	似ているが、知能の発達にばらつきがある。	普通は異なる。そのためメンバー間に不満を引き起こす原因になる。
3、身体的能力	似ているが、同じ能力を持つ必要はない。年長者は身体的に弱者をカバーして、集団の行動力を保つ。	小学5年生から中学3年生までの年齢の開きがあるため、相当の相違がある。グリーンパー以外に身体的に優れている者がいると、班を牛耳られる。

4、性的成熟度	年齢による作用なので似ている。年長者は性的情報を集めており、年下の者は知りたいが無関心を装う。	年齢差があるので、相違がある。年上の者は異性に興味を持つが、年下の者は毛嫌いな。
5、行動とルール	リーダーと集団の圧力が一人ひとりを基準に従わせるので、同一になる。集団のルールは単純・明快で、実行の可否によって褒償がある。	他の人によって作られた基準（つまり「ちかい」と「おきて」）の型に、リーダーの圧力によって従わせるので、自然集団と似ている。
6、興味	集団全体の興味が同じ方向に向くと、決定的に同じになる。リーダーの方向と、メンバーのおもしろがる事柄が対象となる。	多種多用のプログラムと進歩制度がある（リーダーがうまく取入れればの話）多くの場合、あまりプログラムに満足していない。
7、成人指導者との関係	大人の介入を嫌う。しかし集団が認めた場合の大人はカウンセラーとなり、少年との間で作り出す相互関係を発展させる。	普通、大人は指導型の関係になる。「指導・助言・激励」の方法とその程度に、慎重さと研究を要する。

《班の設立》

<班長・次長の任命>

班長候補者がきまれば、班員の同意と班長会議の決定を得た後に任命する。

任命するにあたって班長章・次長章を、切符を配るような渡しかたはしていないだろう。記章をただ渡すだけでは、グリーンパーの任務に対して粗末な扱いでしかない。新任の班長の意欲を高め、決意を新たに任命式は、必ず行うべきである。

任命式は、簡素ながらもスカウトの印象に残るような、グリーンパーの任務を果たそうと意欲がおこるような内容を考え、工夫する。

任命に際して隊長が述べる話は、任命中の中核をなすので、簡単ながら話の主旨を十分考えておく。

『君は班長に選ばれた。おめでとう。班長の任務を船に例えれば、班は船であり、班長は船長となって船を操り、海原に出て航海する任務を持つ。航空機で言えば機長であり、鉄道でいえばたくさんの車両を牽引する機関車のような役目を持っている。班長が先へ進めば班員も進歩するし、もし君がやる気をなくして休んでしまえば、班全体も休むだろう。しかし、どんな班でもよき班長の元では正しい班になることができる。きみは班長の任務に真正面から取り組むことが肝要である。

さあ、班長である君と班の前途にはいろいろな面白さ、冒険、それに世界中のスカウト仲間とのスカ

ウティングが待っている。

きみは班長であることによって、できる限りスカウティングを楽しみ、満足するようにしなさい』
そして次長を任命する時には…

『班長の任務を手伝うのが次長の仕事であり、班長からたのまれたことを積極的に果たすのが君の役目である。また班長が何等かの都合で休んだ場合は、班長の代わりを務めなければならないので、次長の任務はとても重要である。

しかし班長を差し置いての振る舞いは許されないので、班長とよく打ち合わせることが大切である。次長の任務を立派に果たすことによって、班長になる能力と資質が磨かれていくので大いに頑張ってもらいたい』

こうして隊長は、班長章や次長章を左腕につけてあげるのだが、そのときのスカウトの眼の輝きをどう見たらどうか。輝いた眼には喜びと若干の不安が入り交じり、それはやがて未来への抱負やスカウティングの期待を思うように感じられよう。隊長は心ひそかに「よいスタートを切った」と確信し、これから始まる班長訓練に思いを馳せるのである。

やがて先輩スカウトの「励ましのことば」に続き、全隊員から新しい班長を祝福する拍手が送られ、班員たちは班旗を高らかに班イェールを唱え、新しい班長・次長を迎える。こうした任命式にスカウトの保護者が出席し、その情景を見るならば新しい班長にとっても効果的であろう。両親はまた自分の子供の成長を感じ取って、グリーンバーの重任を引き受けたことに「影ながら支援しなければならない」という思いが込められていくに違いない。

《班意識の高揚》

<班意識を高める大切さ>

人為的な集団であるボーイスカウトの「班」は、隊長の支援がなければ班員間のつながりは簡単に切れ、班の結束がもろくも崩れさる。

班長が班員たちを率いていくには、みんなの気持ちを一つにまとめなくてはならないが、その方法の第一は班員の一人ひとりが『同じ班のメンバーだ』という意識を高めることである。特に次の事項は仲間作りのための基本的な要素であり、たとえ1個班しかない隊であっても省略せず採用すべきである。基本をおろそかにしたり、行うことをためらってはこれからの発展はない。

とにかく初心に帰って、班員相互が『同じグループに所属する仲間なのだ』という意識を、強烈に高めるように実践していこう。

<班旗を高く！>

月間のテーマに「班旗を高く！」という言葉がよく取上げられるが、班長・次長が交代したときや、新しく班編成をした時期には班旗の存在を見直し、もう一度確立しよう。

なぜなら、班のシンボルである班旗をいつも強調することによって、仲間意識を高めることができるからである。ところが隊によっては班旗の影すら見掛けないし、隊長も班旗の重要さを少しも気にかけない様子が見受けられる。

班旗を持たなくなった理由の一つは、スカウトが集会への往復に班旗を持ち歩くのが面倒になったり、活動する時に邪魔もの扱いすることにある。しかしどんな理由があろうとも、隊長が班旗を重要視すれば、班長も班員も必ず大切に扱うようになるものだ。

- ・班集会・隊集会の中での班活動、ハイキング、キャンプなどで班を単位として集まった時、解散する時等では、《班旗を中心においての、スカウトが考案した簡単な儀式》を行う習慣をつける。
- ・ゲームを行う際は、ゲームの用具や根拠地のしるしにするなど、必ず班旗を活用する。
- ・隊集会で班を表彰するには、必ず班旗に表彰のリボンなど《しるし》をつける。表彰する行為は月に一回以上あることが望ましい。また隊長の気分次第で行ったり、当たり前の事に対して表彰しては教育的価値がなくなるので、表彰の内容や基準を明確にしておくことが肝要である。班が努力し自他ともに認めた行為は表彰されるべきであり、班の仲間が一致協力したことを認められれば班意識は一層高まり、一人ひとりの活動意欲がさらに高まっていく。

こうして自分が所属する班は、すばらしい仲間の集まりであり、自分が『この班にもっと貢献しなければならない』と思うようになれば、もう成功である。

伝統がある班では古めかしい班旗を大切に持ち続けるのもよし、新しい班長になった機会に新調するのもよし、とにかく自分たちの仲間のシンボルを高く掲げることを考える。

日本連盟需品部にある無地の班旗を購入し、班名のシンボルを描き入れればたやすくできるが、スカウトが家庭科でならった裁縫の腕を発揮させるために、布地から製作させていくのも楽しみである。

この場合、一人のスカウトが全部製作してしまうのではなく、班員の全部がひと針でも、ひと筆でも、製作に加わっていくことが大切だ。

<手製の班別章をつける>

動物の名前を班名にした場合は、既製品の班別章が手取り早く入手できる便利さと持続性がある。既製品がない時は特別注文しなければならないが、班意識を高める方法として班別章をみんなで作れば格別な味わいがあり、愛着心も起きて、なかなかのものである。

班別章を作るのはいたって簡単で、材料は市販のフェルト地で異なる色を買って製作する。

器用さ、不器用さが出来映えに影響するが、山鳩が“にわとり”に見えようとも、自分たちの手によって作った班別章にはそれなりに尊いものがあり、班の仲間だけが味わえる満足感がある。

しかし手製の班別章は、制服を洗濯する時に面倒でも取り外さないと、悲惨な形になってしまうことを忘れないようにする。

<班呼・班標語・班精神>

指導者講習会とか、ウッドバッジ研修所等において講義を聞き、実習したことがある班呼・班精神・班標語・班イェールなどは、グループの団結心を高め、班の目標となる重要な要素である。これらは活用しなければしないで済んでしまうが、活用しない班は活動を成長させる手段を放棄しているのであり、もったいない話だ。

班呼を必要とするゲーム、つまり班の仲間しか通用しない合い言葉を用いた目隠しゲーム、暗闇の中での陣取り合戦などは、班意識をより高める方法である。

班名にちなんだ班精神、班標語は仲間全体の行動目標であり、実行しようと決めた目標には班長自らが実行する努力を続け、班員たちがそれを見習うように仕向ける。やがて班員たちの実行しようとする気風が高まったとき、それは隊全体の規律と秩序に素晴らしい影響がある。またそうしたときはすかさず班表彰を行い、次の活動意欲の原動力になるように努めよう。

《班長訓練へ向けて》

<まずは実践躬行>

日本のスカウト運動において指導者訓練の道を拓かれた佐野常羽先生は、指導者訓練所(後の実修所)の指導方針に“清規三事”と題して「実践躬行・精究教理・道心堅固」を掲げられたが、現在の指導者にも当てはまる「座右の銘」である。

実践躬行(Activity First)。つまり班制度についてどんなに説明を聞いても、数々の文献をひも解いても、「実行していなければ成果は得られない」ということである。何よりもまず実行し、成功とか失敗を積み重ねて、真の班別制度を実現するしかない。

また「指導者は始動者たれ」というのも、よく聞く言葉である。隊長が動き始めてきっかけ作りをするのももちろんだが、班長も班の指導者である。班長らしく始動するように、隊長は援助に徹しなければならぬ。そのために焦らず、班長自身が気付き、自分から努力しようとする意欲が高まっていくように、班長訓練を行うことが要請されるのである。

<よい班長はよい社会人となる>

「よき班長を育てる…。隊長としてのあなたの努力が、班制度の発展に大きく寄与する」この言葉はウッドバッジ実修所の奉仕実績訓練報告書を閲覧した所長として、所見欄に評価とともに必ず書き添えている一言である。

「班長をどのように育てるか」が班制度充実の鍵であり、隊長の適切な指導によって育った班長は、必ずやそれに応え、班員を導き、活発なスカウティングの先頭に立っていくのである。

そればかりではない。班長時代に身につけた指導性や協調性、そして幾多の試練を乗り越えたときに得た不屈の精神は、やがて成長して社会人になった時に大いに役立っている。このことは75年に及ぶスカウト運動の歴史の中で、班長経験をもった、かつての「よき班長」が、今や有為な社会人となり、各方面で活躍していることで実証できよう。

<班長訓練を行う際の留意事項>

●1個班の場合でも行う

1個班の隊では班長はたった一人。たった一人でも班長訓練は行うべきで、班長の能力と資質を育てていこう。

少人数のスカウトしかいないと、隊長は能率よくやろうとして全員を対象に指導してしまう傾向にある。

いつも全員を相手に指導しては、班長が育たず、班活動もない悪循環が始まる。班長に任命されたスカウトも、班長とは名前ばかりなので、やがてスカウト活動に魅力を失い、やめていくことになる。

●班員が班長にあこがれるよう

班員が班長をどのようにみているかが、班活動を進めていく上に大きな影響がある。班長を尊敬し、あこがれの的であるように工夫する。

その第一は班長に特権をもたせることから始める。隊として班長にしか許されない些細なことでもよいから特権を与えてみる。例えば隊の集会所に隊長室(またはコーナー)があるならば、班長だけは入室でき、隊長の家ならば、班長のみを招き入れられる。

実際に隊長の家は家族的な暖かみがあって、集会所では味わえない雰囲気により、隊長と班長の関係

はますます緊密になっていく。

また班長だけに貸与された用具を持っているとか、野営用具倉庫の鍵を預けることも考える。しかし本当に班長を慕うのは、そういうことより班員に対する思いやりである。

●真の愛情を持って

いたずら好きなスカウトや隊長のことを聞かないスカウト、なかなかしゃべらない子とか利発な子など、性格がみんな違う。ただ一つ同じなのは、どのスカウトにも『健やかに成長してほしい』という親の願いがかかっているということである。隊長はどのスカウトに対しても、同じように公平に接し、分け隔てのないように心がける。

それに、自分の心の中に少年と同じような心を持つように努力する。

そうすれば年齢が大きく離れていても、少年たちが必要とするもの、望むことなどが見えてこよう。

隊長が、広い心とあたたかく愛する心を持って班長と接したとき、彼らは信頼する心をもって応えるに違いない。

●個性教育をわすれない

指導者の大きな役目は、スカウトの長所を見出し、伸ばしてあげることにある。隊長ハンドブックでは『スカウト自身でも気づかない、かくれた性質や能力を発見して伸ばしてやること』といっている。だが実際には大変むずかしい。

短所はすぐ目につくが、長所はよく観察しないとなかなか発見できない。スカウトの個性を発見するには1にも2にも観察であり、隊長と副長でよく話し合うことが望まれる。

スカウトの性質を熟知できるのは何といっても夏の長期キャンプだが、班長訓練の機会も個性発見に努力して、人格向上の場とする。

●次長の訓練も併せて行う。

次長の存在は実に重要である。なぜなら、次長は班長の代行業務を任せなければならない責務があり、しかも次代の班長となる素質を有するスカウトである。その意味で単なる代行ではなく、彼の人格を認め、班長と同じように育てていこう。

そうかといって大事に扱いすぎてもいけないし、班長の権限を越えた行動をさせてもいけない。

<班長訓練の機会>

●班長訓練の現状

誰もが班長訓練の重要性を承知しているが、実際にはたやすく実施できない。ある隊ではスカウト出席状況の悪さが続いて、次第に訓練をやめてしまうようになった。

不参加の理由は、塾通い、身体の調子が悪い、などと様々である。

実施し得ないもう1つの問題は、指導者と班長たちとの時間的都合が容易に一致しないことだ。指導者には仕事があり、スカウトも最近は結構忙しくて、双方に都合がよい日時を取れない悩みがある。

しかし「人格訓練」である班制度を確立しなければスカウティングの目的は果たせないのである。

幸い学校週5日制が進展しつつある昨今、月に一度程度の班長訓練はなんとか実施したいものだ。

●長時間を要する班長訓練

ある程度まとまった時間を要する班長訓練は、それだけ班長にとって重要な事項を訓練することが可能になる。各班長はこの訓練に参加することにより、自分の班の班員をリードしていくための数々の方

法を学び、自信と意欲を持つようになる。

次のプログラム題材を行うには、1～2時間から半日、ないしは1日を要する。場合によっては1泊キャンプや舎営等も選択する。

★班長に必要なプログラム題材

- ・班長のための進級課目の実習
- ・班活動に活用する各種工作、ゲーム、競技、スカウト技能等の実習
- ・上記に関する事項のヒント、作業要領の体得
- ・ハイキングコースの課題実習
- ・長期キャンプのための実地踏査、1泊キャンプ
- ・班費の出納管理について
等々

多くの時間を要する班長訓練ほど、日程を早くから決定する必要があり、隊スタッフと班長たちの双方が参加できる最良の日時を選ぶ。

長時間の日程が作れない時は、早朝に行うとか、あるいは第二金曜日の夜から土曜にかけて実施するなど、隊によって様々な工夫をすることである。

●短時間の積み重ねの班長訓練

班長の資質を向上させる機会は、何も長時間かけなくても、スカウト活動のあらゆる場を捉らえて実施することができる。

★班長の資質を高める題材

- ・班長の心構えについて
- ・「ちかいとおきて」の実行
- ・班長の指導力を高めること
- ・班の仲間意識を高揚すること
- ・自己啓発のヒント
等々

上記の題材では、特別に長時間を設定する必要はなく、スカウト活動の折に触れて訓練できる内容である。

班長教育という観点から、短時間による、少しずつの積み重ねによって大きな「目的」が達成できる。

例えば隊集会の開会前では、班長の心構えについて話し、集会が終わったあとには、班長の努力をほめ、よかったことを評価し、改善点を検討するなど、その場で行っていく。

《班長訓練をいかに行うか》

<3Fの要素>

班長訓練だからといって、かた苦しく、むずかしい顔で指導しようとしてはいただろうか。

班であろうと、隊であろうと、どのプログラムにも必要な要素…スリーエフ（コンビニエンスストアではない）は班長訓練にも欠かせない要素である。

★3Fの要素

- FUN————面白くふざけること
- FIGHTING————戦うこと
- FEEDING————食べること

つまり、少年たちは『遊んで、争って、食べる』の3つが、日常的に必要なので、いつの集会にも含めるように考える。

楽しみと闘志にあふれ、いつも腹をすかせ、いたずらとバカ騒ぎをしでかし、興味あるものに目をつけては刺激を求めるのが普通の少年である。もしそうでなかったら異常であり、大人になってから問題を起こす人になる。

特に隊長が精神的な内容に触れようとするならば、3Fの要素のどれかによってまず本能が満たされ、あるいはうっ積したものを発散させ、それから班長たちが落ちついた心でのぞめるように図っていく。

<班長の心がまえを作る>

班長として、心の準備をさせるには、「班長の任務」はどんなことをわかりやすく説明する。

班長の任務をよく理解した班長は、積極的でやる気を出し、中途半端な理解では自信がなく、消極になっていく。

「班長の心がまえ」

- ・任務を果たす努力をする。班員のためにやる気を出す。
- ・次長は「よき協力者」と考え、任務を分けあたえる。
- ・班員の気持ちを理解するように努め、言葉づかいに気をつける。
- ・自分の班だけ「良ければいい」のではなく、他の班も思いやる。

個人の性格を変革させることは非常に難しいが、「心がまえ」は訓練の積み重ねによって向上できる。

<班長の進歩を優先する>

●進歩制度の大切さ

「班制度と進歩制度は車の両輪のごとく…」という言葉はどの指導者訓練でも聞かれる。ということは、スカウト活動ではどちらも大切であることを示している。

進歩制度において、初級、2級、1級スカウトへと段階的に進歩したのは、技能面ばかりでなく、人間的に成長したことを意味しており、よき社会人たる資質が向上したことを表す、「人生の一里塚」の様なものである。

スカウト活動では班制度と進歩制度の双方をうまく活用してこそ、人間的成長が図れる…。このことを隊指導者間でいつも話し合おう。

●班長の進歩優先

隊長は、班長、次長の進歩を班員より優先させることを、いつも念頭に置く。

スカウト数が少ないと、能率良く技能訓練をやらうと考え、班長を含めた全員を対象にしたくなるも

のだが、それでは班長が育たない。

班長の進歩を優先させない隊長は育ちつつある班制度を、自ら破壊するようなものである。進めにくい状況にある場合もあるが、たとえ1個班であっても、班長・次長を先に訓練して、進歩優先を心がけることが重要である。

● 考査水準の目安

進級課目、特修章課目における考査の水準は、隊長の研修程度に比例する。

同じ1級スカウトを認めるにも、研修所を修了した指導者がスカウトを指導し考査した水準より、実修所を修了した指導者が行う考査のほうが概して水準は高い。

不思議なことに、レベルが高い場合であっても、隊のスカウトたちは当然のように受け止め、自分を高めていくのである。

つまり、スカウト活動の質は、隊長・副長の研修程度によってレベルが上下することを知り、指導者訓練に参加することの大切さを認識しなければならない。

● 進歩の記録を確実に

スカウトがなかなか進級しないのは、記録が不十分なことに起因する。

特に班長・次長の進歩を優先するには、考査が終わったその都度、忘れずに記録することである。そうすればこの班長にとっては「次は何の訓練が必要であるか」が計画でき、進歩の早道となる。

班長たちの進歩状況を十分把握して、進歩の最短距離を進めるよう隊長が努力すると同様に、班長にも班員一人ひとりの進歩状況を把握させる。班長は次長と分担し合って班員各自の進歩記録帳に記録して、進歩担当の副長に報告するように習慣づける。

スカウトの考査状況が隊の「進級記録簿」に確実に記録され、「進歩一覧表」が活用されているかを再点検し不十分ならば改善しよう。

< ちかい・おきての指導 >

● 隊長の理解が第一

自分の一生を内省する鏡であり、自分をいましめる力とする「ちかい」。日常生活の物差しとして、自分自身の行動律「おきて」。

これらを指導するには、隊長自身がちかいとおきてを十分理解していないとやっかいなものになってしまう。

結索法のような形而下（形あるもの）の技能訓練ならば、資材や用具を準備して気楽に導入できる。ところが形而上（形を知覚できない）のちかいとおきては言葉でしか表せないの、隊長の表現力だけでは難しく、時期と場所を慎重に選ばないと効果がない。スカウトが遊びたくてむずむずしているようなときに、隊長がいくらい話しても、まず受け入れられない。

隊長の経験にもとずいた話しは、スカウトの関心と呼ぶし、何かの事件とかインパクトがあったとき、あるいは自らの行動を内省して自己をみつめようとするときは、素直に隊長の話をきく。

● しつけから自己の習慣に

スカウトの活動が「おきて」に沿って実行されることを望めば、はじめはある程度の躰（しつけ）が必要である。

躰は「身を美しくする」と書く。「おきて」の実行には「しつけ糸」を施すのと同じように、形が整うまで形而下のことから進めていく。

例えば班長の姿勢、服装、身体の清潔さなどから整わせていったり、ゲームのルールをお互いが守って、公正なプレイをする。

始めはしつけが必要であっても、やがて自分から実行するようになり、それがいつしか習慣化するようになり、繰り返し話しかけ実行を励ましていくことが大切である。

班長訓練は、ちかいとおきての実践に際して、誰も見ていないところでも実行でき、習慣化するようになり「きっかけ作り」をする場である。

● 新聞記事の活用

近年、「NIE」(Newspaper In Education) という方法が学校の授業で活用されている。「教育に新聞を」と新聞を生きた教材にして、社会への参加意識を高める教育手段に使われているが、スカウト活動では戦後再発足の頃からちかいとおきてなどのゲームに用いられてきた。

例えば「おきて」からテーマを選ぶと、それに関連した新聞記事を切り抜いて発表しあう。さらにすんだ隊では、それらをロールプレイ（役割演技）で発表する。早い話、営火のスタンプの題材に「ちかいとおきて」を関連づけたものと思えばよい。こうしたゲームは隊集会の中で興味深く行え、利用価値は高い。

また班長には、新聞の社説切り抜きを与えて、それを参加者のまえで自分なりの解説をさせる。もちろん班長の能力に応じて若干のヒントを与える必要もあるが、班長たちはすばらしい解説を発表するだろう。

新聞は社会の動きを伝える生きた百科事典と考えると、政治の仕組みや世界の中の日本などを、身近な問題として取上げることができる。

● 隊長が示す模範

折に触れてちかいとおきてを理解させ、日々に実行するように指導してきたら、あとは隊長の言動にかかっている。

それは隊長の言動がスカウトに大きな影響を与え、良いことも悪いこともみんな真似をするからである。隊長の話し方から口ぐせ、ちょっとした動作まで似てくる。

隊長ハンドブックの47ページを再確認し、自分の行いに責任を持とう。

《班長は教えられ、教える》

< 班長訓練は隊長が行う >

班長が技能を体得して指導能力を高め、班員に教えられるようにしたいと隊長はいつも念願している。それにはグリーンパーを連れて野外にでるのが早道である。短いコースでも盛りだくさんの技能訓練を含めることができるグリーンパーハイキング。そして週末1泊キャンプではいろいろな技能訓練を行える。しかし技能訓練は安易にインストラクターやローバースカウト任せにしてはならない。得手不得手は誰にもあるが、小・中学生にできる技能であり、大人ができないはずはない。

技能のどこが難しいのか、練習を先に体験しておけば、班長に対する指導要領がわかる。

<班長が教える側に>

班長訓練によってどうやら技能が身についた班長は、いささか頼りなく見える。それが班員に教えることによって自らもう一度学び、技能を確固たるものにしていく。『教えられた者が教える側に回る…』。これも班制度の大きな長所であろう。

<班イェールの活用>

班イェールは、班意識を高める上で最も活用度が高い。班イェールを唱える機会を作れない隊は、沈滞した隊ともいえる。

班イェールは、班名にちなんだ内容の他に、ニュージーランドのマリオ族、あるいはアフリカ諸国の勇壮な部族のイェールなどからヒントを得て、工夫することを奨励する。

班活動を始める前とか解散する時、あるいはこれから班の力を結集してゲームに臨もうとするとき、そしてゲームに勝ったときなどは、「勝ちどきの班イェール」を高らかにあげるなど、大いに活用しよう。

<班報告書の提出>

記録とか報告書を作成するのは大人でも苦手なことがある。しかしボーイ隊の時代で一旦記録する習慣がつけば、シニアスカウトになった時に大変役に立つ。

班集会の班報告書は、班の状況を知る上で重要である。だが提出するば良いのではなく、次のステップのための資料として必要事項を性格に書き入れることと、感想なども書き入れるように指導するとよい。

<班の会計>

班の会計係は、任務を成し遂げるよい機会であるが、隊長はその管理に責任を持たねばならない。それに班費を扱うときはもっと気を使う。

廃品回収等の労働による収益金を班で貯めたり、無理のない金額の班費を集めて活動資金にすることは、班の結束を高め、計画的に支出することができて活発化する。

隊長は班費の妥当な金額、保管方法、出納簿の記帳に留意し、提起に会計報告を求めていく。

<一つ間違えばの話>

班長のグループの統率力や指導力を高めようとするとき、一つ間違えば面倒な方向に進むことがある。

異年齢集団において起こりやすい出来事、それは年上のスカウトが班長の特権を与えられたために、権限の過剰発揮、むやみに威張る、横柄さ、無理強い、命令によって扱き使う、私的用事をいつけるなどの行為を取ることである。

隊長が班長教育に手を抜いたり、適切な助言を行っていないと、せつかくの班制度が逆効果になることに、十分な配慮をしなければならない。

<班員を獲得する方法>

カブ隊の「くまスカウト」を自分の班の活動の場へ招待する計画を立てる。楽しいゲームや自慢の野外料理でもてなすとか、様々な工夫する。計画ができればカブ隊の隊指導者と話し合って日時を決める。

班長は自分の班員たちが他の班よりも進歩している状況とか、チームワークのよさをアピールする。

そして後日、上進しようとするカブスカウトにどの班に加入したいかを選ばせる。これは班長にとって厳しい試練になるが、実施して価値がある方法である。

当初は不均衡になるが、一時的にはやむを得ない。そのかわり、加入希望が少ない班の班長には、いろいろな知恵を授けて回復を待つ。要は班長のリーダーシップ、班員を思いやる気持ち等が、いかに大切であるかを理解でき、後の活動に参考となればしめたものである。それは社会人になったときにいちはん有用だから。

<初級スカウトは班長が育てる>

自分が班に迎え入れた新入隊員は、班長が「初級スカウト」になるよう指導する。カブ隊から上進したスカウトは後わずかの指導で初級章課目を完修するであろうし、新規に入隊したスカウトの場合は始めから指導できる。班長の実力を養うのによい機会となり、班の前途は明るい。

《スカウトタウン》

<スカウトタウンを理解する>

「ちかいとおきて」の実行を勇気づけるもの…。それはスカウトタウンであり、信仰の導きである。信仰への導入プログラムはいくつかあるが、信仰心が芽生えるような環境、雰囲気の中では、隊長の話しが最も有効である。

欧米のスカウト連盟専用の野営場では、必ずといっていいほど一角に礼拝場がもうけてあり、静寂の中でしばし祈りの時間を持つことができる。そうした信仰を深める場があって羨望の思いがあるが、日本のスカウト活動でも、スカウトタウンの意義を理解すれば誰でもできる。

(スカウトタウンについては、隊長ハンドブック33ページ、指導者のための宗教ハンドブック118ページを参照)

<スカウトの手によって>

スカウトタウンが文字どおりスカウト自身の手によって、スカウト達の司会によりそれぞれの信仰に基づいて行われるならば、どんなに素晴らしいことだろう。

そのために隊長としてスカウトタウンについて理解を深め、積極的に行うことが望まれる。しかし次の諸点に留意することが肝要である。

- 指導者自身が所属する宗派の教義を学び、信仰心を深める。
- スカウトたちに信仰の大切さと、スカウトタウンについてよく説明する。
- 聖職者(牧師・司祭・僧侶・神官・教師など)のお話を聞く機会を作る。
- スカウトタウンにおける「話し」の題材を、日頃から集めておく。
- 初めは隊指導者の司会によりスカウトタウンを行い、やがて班長に理解が深まったら、班長たちの司会によって進めていく。

<スカウトタウンの機会と方法>

通常は班集会や隊集会の、始めか終わりに行う。しかし何と言っても自然の中で、雰囲気が最も整ったときは大きな成果があるだろう。

本来は各自が信仰する宗派別に別れて行うのが望ましいが、人数が少ない班の場合は、全員を単位で行う。

●一般的なスカウトオウンの順序

- ①「始めのことば」
- ②「うた」＝スカウトオウンにふさわしい歌を選ぶ
- ③「話し」＝班長が行う時は、信仰に関する話しを紹介するとか、身近に起きたできごと等から題材を見つけてあげるとよい。いつも「ちかいとおきて」の実行を勇気づける内容であるように心がける
- ④「各自の信仰に基づいたお祈り（または黙禱）」＝声を出さずに所属する宗派の法語を口の中で唱える
- ⑤「うた」（適宜）
- ⑥「終わりのことば」

特に注意することは、ふざけたがるスカウトや、いたずらっ気のあるスカウトがいると、黙想の最中にいたずらが始まり、しのび笑いに触発されて、大笑いの連続になったりする。形式だけにとらわれると、せっかくのスカウトオウンも台無しになる。

B-Pは『班制度はスカウトにとって人格養成学校である』といわれたが、スカウトオウンを行うことによって、「人格の向上」がさらに倍増するようにしたい。

<隊長の使命>

隊長の努力によって、各班の班長は指導力を発揮するようになり、班長らしくなった。ところが班長の中で小集団が活発に動き出したな…と思ったら、もう交替の時期を迎えてしまうのである。そしてまた、明日から、新しいグリーンバーを選任して最初から養成に精を出さねばならない。

隊長の主な任務は、1年を通じて班長教育に明け暮れる感じではあるが、〔リーダーシップを備えた、未来のよき社会人〕を育てる崇高な役割を担っているのである。期待されている隊長として、スカウトたちの笑顔に応え、明日からまた頑張らねばと思う。

（おわり）